FCCの集い
—阪神・淡路大震災から半年 土木家の昨日・今日・明日—

Panel Discussion of FCC (Forum Civil Cosmos) "Future of Civil Engineers in Half Year after the Great Hanshin-Awaji Earthquake"

川谷　充郎 | Mitsuo KAWATANI*

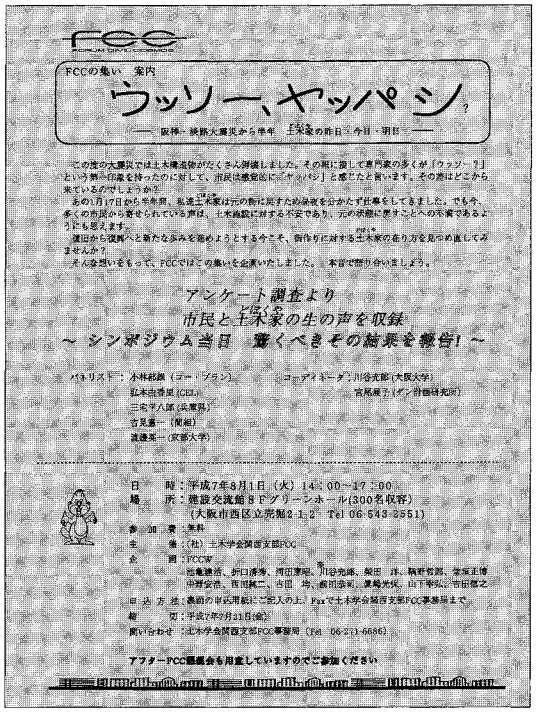
ウッソー，ヤッパシ？

阪神・淡路大震災では土木構造物がたくさん倒壊した．その報に接して専門家の多くが「ウッソー」という第一印象を持ったのに対して，市民のある方は感覚的に「ヤッパシ」と感じたという．その差はどこから来ているのだろうか？

多くの土木構造物は市民の社会生活を支える施設としてある．土木技術者は社会基盤を支えているという気概を持って仕事をしてきた．それで，あの1月17日から半年間，土木家は元の街に戻すため昼夜を分かたず仕事をしてきた．でも，今多くの市民から寄せられている声は土木施設に対する不安であり，元の状態に戻すことへの不満であるようにも思える．復旧から復興へと新たな歩みを進めようとする時こそ，街づくりに対する土木家のあり方を見つめ直す必要がある．そのような想いをもって，震災の地元である関西支部FCCではこの集いを企画した（図-1）．

背　　景

FCCとは，フォーラムシビルコスモスの略であり，「工学」の枠を越えた「土木学」を基本として，21世紀に向かう土木界のあるべき姿を創造的に考えるとともに，土木に関わる情報の受信と発信の場として，1990年度に支部において発足したものである．フォーラムを具体化するための下部組織として，ワーキンググループ（略称：FCCW）を設置して活動してきた．その中の「理念」分科会では，震災後2週間目から数回の会合を持ち，土木関係者以外の方も加えて震災の渦中にある土木について率直な意見を交換し，それをまとめて日本自然災害学会の学会誌に投稿した（被災地からのメッセージ，自然災害科学，阪神・淡路大震災緊急対応特集号，1995.5）．そのような活動を元に，FCCW各分科会からの有志によってこの集いが企画された．


FCCの集い　案内

ウッソー、ヤッパシ？

— 阪神・淡路大震災から半年　土木家の昨日・今日・明日 —

この度の大震災では土木構造物がたくさん倒壊しました。その報に接して専門家の多くが「ウッソー？」という第一印象を持ったのに対して、市民は感覚的に「ヤッパシ」と感じたと言います。その差はどこから来ているのでしょうか？

あの1月17日から半年間、私達土木家は元の街に戻すため昼夜を分かたず仕事をしてきました。でも今、多くの市民から寄せられている声は、土木施設に対する不安であり、元の状態に戻すことへの不満であるようにも思えます。

復旧から復興へと新たな歩みを進めようとする今こそ、街づくりに対する土木家のあり方を見つめ直してみませんか？

そんな想いをもって、FCCではこの集いを企画いたしました。本音で語り合いましょう。

アンケート調査より
市民と土木家の生の声を収録
～ シンポジウム当日　驚くべきその結果を報告！ ～

パネリスト下：小林紘士（テー・プラン）
弘本由香里（CEL）
三宅洋八郎（広電員）
古見喜一（関組）
渡邊英一（京都大学）

コーディネーター：川谷充郎（大阪大学）
宮島廣子（ダン計画研究所）

日　　時：平成7年8月1日（火）14：00～17：00
場　　所：建設交流館8Fグリーンホール(300名収容)
（大阪市西区立売堀2-1-2　Tel 06-543-2551）
参 加 費：無料
主　　催：(社)土木学会関西支部FCC
企　　画：FCCW
西亀徳浩、野口康彦、岡田憲昭、川谷充郎、梶田　洋、鶴野哲郎、宮坂正博
中野俊治、西岡英二、古田　均、森田宗和、美崎光保、山下幸弘、吉田信之
申 込 方 法：裏面の申込用紙にご記入の上、Faxで土木学会関西支部FCC事務局へ
締　　切：平成7年7月31日(金)
問い合わせ先：土木学会関西支部FCC事務局（Tel 06-231-6686）

アフターFCC懇親会も用意していますのでご参加ください

図-1　案内パンフレット

集いの概要

約2カ月半の準備を経て，1995年8月1日（火）14：00～17：10に，大阪市の建設交流館グリー

*正会員　工博　大阪大学助教授　工学部土木工学科
土木学会関西支部FCCW理念G.

写真-1　壇上のパネリストとコーディネーター

写真-2　フロアからの発言と熱心に聞き入る参加者

ンホールにて，FCC および FCCW メンバーを含む土木家とその他，計約 200 名の参加を得て開催された．パネリストは次の 5 名の方々（発言順）である．弘本由香里氏(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所)，渡邊英一氏（京都大学土木工学科)，小林郁雄氏(まちづくり(株)コー・プラン)，三宅平八郎氏（兵庫県震災復興本部総括部計画課)，吉見憲一氏（(株)間組阪神復興対策本部)．

アンケート調査結果

「ウッソー」という土木家の第一印象と，「ヤッパシ」という市民の感覚を裏付けるため，土木家と市民に同じアンケート内容による調査を行い，それぞれ約 200 名の回答を得た．柴田　洋氏（中央復建コンサルタンツ(株)）がその調査結果を報告した．

その中で，『建物や高速道路，橋梁が壊れている様子を見てどう感じたか』について，「信じられなかった」が土木家の 70%，市民の 80% である一方，「やっぱりと思った」は市民の 10% で土木家の倍以上であった．また，それらが『なぜ壊れたと思うか』では（複数回答あり)，土木家の 80%，市民の 70% が地震力の大きさを理由にあげたが，「設計・工事に問題があった」とする市民も 35% に達し，土木家より 4 割多かった．さらに，『高速道路・橋梁などの復旧方法や安全性に関して，市民に十分に説明されているか』については，ともに 80% 弱が「ほとんどあるいはまったく説明されていない」と回答した．土木技術者は『震災復旧に貢献しているか』『社会のために働いているか』との問いに対して，市民の半数は「貢献し，よく働いている」としているが，35% は「よく知らない」と回答した．

回答の大勢において，土木家と市民で大きな差異はないものの，少数意見では両者に顕著な差異の認められる場合もあった．それらより，土木の実態と土木家の姿が市民の眼にきちんと写っていないことが伺えた．

パネルディスカッション

宮尾展子氏((株)ダン計画研究所)と筆者をコーディネーターとして，パネリストからの話題提供に基づきパネルディスカッションを展開した．

弘本氏は「ウッソー，ヤッパシ？」の言い出しっぺとして，自らの被災体験に基づいて「時空を失った体験からアイデンティティをいかに取り戻すかの苦闘の中で，家を失くした喪失感を味わっているのに，壊れた土木構造物を見ても痛みを感じなかった．自分は構造物はいつ壊れてもおかしくないと常に意識しているが，土木技術者が市民に不安を抱かせない自負心を持っていることに驚いた．生活スケールと技術スケールとが合わなくなっているところを地震が襲った．人の生活の像が見えなくなっているところに技術のあることが問題」と市民からみた土木技術を率直に語った．

渡邊氏は「構造物の存在意義と設計思想」について，「大都市はインフラという生命維持装置に依存しているが，それが刃を持っていて人々を襲ってきた」ことを指摘し，構造物の設計における安全性の考え方を親しみやすい絵を用いて説明